

有壬だより

2026・7・1

第77号

発行

新潟大学医学部学士会

〒951-8510 新潟市中央区旭町通1

TEL 025- 227- 2037

題字 宮村定男

学長就任のご挨拶



第17代新潟大学学長
伊ま じろ 幸先生 (F58)

今回、新潟大学医学部学士会の皆様に、学長就任のご挨拶を申し上げる機会をいただき、心より感謝申し上げます。

私は平成10年に新潟大学医学部に着任して以来、精神医学の教育・研究・診療に携わり、医学部長、理事・副学長を経て、このたび学長に就任いたしました。大学全体の責任を担うことの重みを深く受け止めつつ、身の引き締まる思いで日々の職務に当たっております。

私の新潟大学での歩みの多くは、

医学部とともにありました。その医学部は、1869年の施蘭薬院開設以来、157年の歴史を刻み、教職員、学生諸君、そして各地で医療、研究、教育に尽力してこられた学士会の皆様に支えられて発展してきました。皆様のこれまでのご尽力に、改めて深く敬意を表し、心から感謝申し上げます。

新潟大学はいま、大きな転換期を迎えております。少子化、人口減少、国際競争の激化など、大学を取り巻く環境は厳しさを増しております。そのような中で大学に求められるのは、現状を維持することではなく、知の力によって人と社会の未来を切り拓いていくことです。私は、研究力を大学発展の基盤と位置づけ、教育、研究、地域連携、国際化を一体として高める大学運営を進めてま

いりたいと考えております。

現在、新潟大学は、研究力強化と大学院教育の充実において、社会から大きな期待と責任を託されております。その期待に応え、次のステージへ発展していくためにも、医学部が中心的な担い手として、力強くその役割を果たしていくことを期待しております。学士会の皆様には、今後とも同窓の絆を大切にしながら、現役学生や若い医師・研究者を励まし、医学部のさらなる発展とともに支えていただければ幸いです。

新潟大学が、地域に根ざし、世界へ開かれた大学としてさらに発展していけるよう、私も力を尽くしてまいります。引き続き、ご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

脳研究所長就任のご挨拶



新潟大学 脳研究所長
まつい ひであき 松井 秀彰先生 (FH13)

きたことは、本研究所の大きな特色です。半世紀を超える歩みの中で、本研究所は脳の病気を深く理解し、医療と社会に還元するという使命を一貫して担ってまいりました。

私自身、神経難病の病態解明と治療法開発を志し、小型魚類からマウス、培養細胞、さらにはヒト剖検脳まで、多様なモデルを組み合わせて研究を進めてまいりました。脳研究所には、分野横断的に議論し協働できる文化と、脳組織・病理標本などの貴重なリソースがあり、脳の病気の本質に迫る研究を展開できる、得難い環境があります。こうした伝統と基盤を次世代へ確かなにつなぎ、若い研究者や学生が大胆に挑戦できる場を守り育てること、そして日本や世界の脳研究において確固たるプレゼンスを発揮することも、所長としての重要な責務であると考えております。

本年4月には組織改編を迎え、研究所は新たな体制で次の時代へ歩み始めます。これまで培ってきた臨床・病理と基礎研究の融合をさらに深めるとともに、進化生物学、分子生物学、データ科学・AI、最先端の神経科学を柔軟に取り入れ、脳疾患の克服はもとより、障がいや老化とともに生きる社会にも貢献してまいりたいと考えております。また、研究成果を社会へ還元し、地域社会や産業界との連携を通じて新たな価値を創出することも、これからの脳研究所に求められる大切な使命です。

脳研究は、患者さんご家族の願い、医療者の努力、そして本学を支えてこられた多くの先達と現教職員の志の上に成り立っています。学士会の皆様におかれましても、引き続き温かいご指導とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

「脳といのちのイノベーションハブ」の開所式について

新潟大学は、文部科学省「地域中核・特色ある研究大学の連携による産学官連携・共同研究の施設整備事業」の支援を受け、「脳といのちのイノベーションハブ（BIH）」という新棟を池原記念館の跡地に建設していたが、令和7年7月末に完成し、同年12月18日（木）に開所式を開催した。本施設は、「PEAKS事業における重点分野である「脳といのち」領域の柱として、ヘルス・ライフサイエンス分野の研究力強化と産学官連携の推進のための全学的拠点となることを目指す。

開所式は、牛木辰男（当時学長の開会挨拶の後、西條正明文部科学省

科学技術・学術政策局長、花角英世新潟県知事（代理・越中隆広総務部長）、牛木学長、柿田明美教授の4名によるテープカットを行い、研究・共創の新たな拠点としての船出を祝った。今後、BIHでは、基礎研究から応用、社会実装までを見据えた研究活動を展開するとともに、多様な研究者や組織が交流・連携できる環境を整備していく。

特に本施設の中には令和8年4月1日付で「ひと脳研究資源イニシアチブ推進センター（略称：ChBRI（シブリ）」が開設された。ChBRIでは、BIH3階に世界トップクラスのブレインバンクを設置し、2階および4階には実験室や顕微鏡等の研究設備を備える。ひと脳研究に関わる多様な研究資源を統合・高度化し、学内外との連携を通じて先端的研究を推進することで、新潟大学の研究基盤を支える重要な役割を担うことになる。

このようにBIHは、「脳」と「いのち」を起点に全学の知を結集し、人材育成と研究成果の社会実装を通じて、地域から世界へと発信する研究大学の形成に貢献していく拠点となることが期待されている。

（牛木 辰男・D57）
（柿田 明美・DH01）



令和7年12月18日 BIH開所式テープカット

紙面から

2面・3面・4面・5面

新任教授紹介

退任学長・教授紹介

医学研究助成金受賞者

有壬記念医学生研究奨励賞受賞者

学会報告・学会予告

8面

有壬記念学術奨励賞受賞者

一枚の写真から

新刊図書案内

有壬セミナーご案内

◆学生のページ

6面 学生特集

7面 研究室訪問

クラブ紹介

たまにきなせやこんな店

新任教授紹介



魚沼基幹病院
呼吸器・感染症内科
小室俊之先生(DH05)

小室俊之先生は2026年4月1日付で新潟大学医歯学総合病院魚沼地域医療教育センター特任教授に就任された。小室先生は1993年に新潟大学医学部を卒業後、新潟大学第二内科に入局され、呼吸器・感染症内科における診療・研究・教育に尽力されてきた。米国National Jewish Medical and Research Centerへの留学を経て喘息を中心とした診療・研究に邁進され、本邦の喘息領域を牽引されている。2021年には新潟大学医歯学総合病院呼吸器・感染症内科病院教授に就任され、このたび特任教授として新たな門出を迎えられた。

小室先生は常にフランクで親しみやすく、ユーモアを交えながら周囲を和ませてくださる一方、診療や研究には真摯に向き合われ、その熱意と探究心には圧倒されることが多かった。医学以外の知識も豊富で、特にスポーツへの情熱は並々ならぬものがある。その情熱ゆえであろうか、私が大学院生時代、小室先生が研究されていたトレッドミルを走る運動誘発喘息マウスモデルを初めて見たときの驚きを今でも覚えてい

る。新しい発想を追求しながらも患者さん一人ひとりに誠実に向き合う姿勢は、多くの医局員にとって目標そのものである。今後のさらなるご活躍を心より祈念申し上げます。
(島賢治郎・DH20)



保健学科
金子佳賢先生(FH06)

金子佳賢先生は、基礎医学と臨床医学の双方に軸足を置き、研究と診療を重ねてきた医師・研究者である。平成6年に東北大学医学部医学科を卒業し、同年、新潟大学医学部附属病院で内科研修を開始した。平成8年には、荒川正昭先生が主宰する新潟大学医学部第二内科科学教室に入局し、腎・膠原病領域の研鑽を積んだ。平成9年には新潟大学大学院医学系研究科博士課程に進学し、千葉大学医学部附属高次機能制御研究センター免疫機能分野で、谷口克先生、中山俊憲先生の指導の下、自己免疫性肝炎モデルにおけるNK細胞の研究に取り組んだ。平成13年に医学博士を取得後、平成16年から2年間、米国Rockefeller Universityに留学し、J.V. Ravetch教授の下で自己免疫疾患におけるIgG糖鎖の研究を進めた。帰国後も新潟大学で診療、研究、教育に力を注ぎ、平成27年に医学部腎・膠原病内科科学講師に就任。令和8年からは医学部保健学科教授として、次世代の医療人育成と研究の発展に取り組んでいる。

(小林 大介・FH10)



眼科学
赤木忠道先生(FH10)

赤木忠道先生は令和8年1月1日付で新潟大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野の教授に就任し

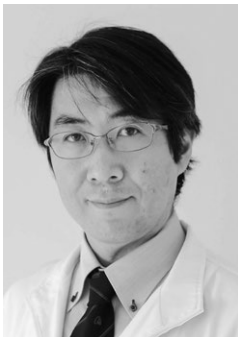
た。赤木先生は1998年に東北

大学医学部を卒業後に京都大学医学部附属病院眼科でキャリアを開始され、iPS細胞による網膜の再生医療で高名な高橋政代先生の教室で基礎研究に従事、さらに眼科手術のメッカである天理よろづ相談所病院で研鑽を積まれた臨床と研究の両刀使いである。その後、2010年に京都大学大学院医学研究科眼科助教、2013年に同講師、2016年にカリフォルニア大学サンディエゴ校眼科客員研究員、2018年に京都大学大学院医学研究科眼科准教授とキャリアを積まれ、2021年には当時の福地健郎本学教授から本学眼科学分野の伝統である緑内障の臨床とイメージング研究の能力を請われ新潟大学大学院医歯学総合研究科眼科学准教授に就任した。

本学准教授に就任してからは緑内障という専門分野を超えて若手の育成に情熱を注がれ、教室の臨床研究は発展し論文の上梓も増えており、入局者も増加傾向である。

赤木先生の教室の臨床と研究を発展させたいと願う情熱と行動力を教室員一同は日々間近に感じ、気持ちいを新たにしている。今後の教室の発展に学士会会員の皆さまにも期待していただきたい。

(植木 智志・DH11)



呼吸循環外科学
白石修一先生(FH10)

令和8年2月1日付で新潟大学大学院医歯学総合研究科・呼吸循環外科学分野教授を拝命した。私は平成10年に愛媛大学医学部

を卒業後、関連病院で外科研修を

行い、その後、国立循環器病研究センターにおいて全国から集まるレジデントと切磋琢磨しながら心臓血管外科手術の研鑽を積んだ。平成16年に新潟大学第二外科へ入局し、林純一名誉教授、土田正則名誉教授、高橋昌教授のもとで修練を重ね、大学院では単心室症に対するフォンタン術後の心機能および運動耐容能に関する研究で学位を取得した。平成26年には福岡市立こども病院へ国内留学して多くの高難度手術を経験し、帰局後に新潟県内初となるノーウッド手術の救命に繋げることができた。さらに平成30年にJATSフェローシップ(日本胸部外科学会留学助成)に選出されドイツ心臓病センターミュンヘンへ留学し、最先端の心臓手術を学んだ。帰国後はこれまで培った技術と経験を活かし、優秀な同僚や関係診療科、スタッフと協力して当院を北陸甲信越地方を代表する小児心臓手術施設へ発展させることができた。

今後は当教室の日本有数の心臓血管外科手術の歴史と伝統を継承しつつ、国内外で培った臨床・研究経験と人脈を最大限に活かし、新潟県の循環器医療および新潟大学の心臓血管外科研究のさらなる発展と、次世代を担う優秀な外科医の育成に尽力する所存である。



危機管理センター
大嶋康義先生(DH14)

令和8年4月1日付で新潟大学危機管理本部危機管理センター教授、ならびに、新潟大学医歯学総合病院医療安全管理部長を拝命した。

謹んでご挨拶申し上げます。私は平成

14年に新潟大学医学部医学科を卒業後、新潟大学第二内科に入局し、呼吸器内科医として研鑽を積んできた。大学院在学中は昭和大学医学部第二生理学教室において、明暗期における低酸素換気応答に関する研究に従事し、平成20年に新潟大学大学院博士課程を修了した。平成25年より新潟大学医歯学総合病院呼吸器・感染症内科にて、睡眠時無呼吸症候群の診療をはじめ、呼吸リハビリテーション、呼吸不全および呼吸生理分野を担当してきた。このたび、新潟大学医歯学総合病院長である菊地利明先生のご指導のもと、医療安全管理体制の整備・充実に取り組む機会をいただいた。高度かつ先進的な医療を提供する大学病院として、患者本位の安全で安心できる医療を継続していけるよう、関係各分野の皆様と連携し、全力で取り組む所存である。今後とも、ご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



東京科学大学
未来社会創成研究院
由郷先生(DH14)

この度、東京科学大学未来社会創成研究院の教授に着任した。これまで公衆衛生学を専門とし、国内外で主に高齢者の社会疫学研究に取り組んできた。国際保健学分野では感染症の大型プロジェクトに携わることができ、ミャンマー拠点の立ち上げを機に高齢者の社会疫学コホートを立ち上げるきっかけにもなった。また、疫学調査で関わった十日町市との縁から寄附講座(十日町いきいきエイジング講座)を開設

し、6年半にわたり行政と連携しながら研究活動が続けることができた。このような新潟大学での経験と積み重ねがあったればこそと感謝している。

東京科学大学は2024年に東京医科歯科大学と東京工業大学が統合して誕生し、国際卓越研究大学にも認定された新しい大学である。未来社会創成研究院は医学系・工学系に加えてリベラルアーツの教員も擁する学際的な研究院で、私はプラネタリーウェルビーイングニシアチブの責任者を務めることとなった。気候変動や紛争など混沌とした世界の中で、従来の疫学にとどまらない地球的課題への取り組みが期待されている。新潟大学で培った、一つ一つの研究に地道に向き合い考え抜く姿勢を、これからも貫いていきたい。



名古屋大医
乳腺・内分泌外科学
永橋昌幸先生(DH14)

令和8年2月1日付で、名古屋大学大学院医学系研究科病態外科学講座乳腺・内分泌外科教授を拝命した。平成14年に新潟大学医学部を卒業後、腫瘍外科医を志し、消化器一般外科(畠山勝義前教授)に入局した。癌を深く理解し治療開発につなげたいと考え、大学院では第一病理学教室(味岡洋一前教授)において外科病理学の基礎を学んだ。外科医として研鑽を積んだ後、平成21年より高部和明先生(現ロズウェルパーク癌研究所教授)のもと米国バージニア州立大学に留学し、生化学教室(Sarah Snieded教授)にて高部先生とともに脂質メ

ディエーター研究に従事した。帰国後は新潟大学腫瘍内科（西條康夫前教授）で薬物療法を学び、平成 27 年からは消化器・一般外科（若井俊文教授）で乳腺診療に取り組みとともに、癌ゲノム解析研究にも携わった。令和 3 年に兵庫医科大学乳腺・内分泌外科（三好康雄前教授）へ異動し、最先端の乳腺診療と臨床に根差した橋渡し研究に取り組んできた。新潟大学および関連施設の先生方のご指導により今日の自分があることに深く感謝している。今後は名古屋大学の充実した診療・研究基盤を活かし、乳腺・内分泌外科分野の発展と人材育成に尽力していく所存である。



福島県立医大
会津坂下腎栄養アカデミー
ほそじま みちひろ
細島 康宏先生 (DH14)

細島康宏先生は、2026 年 4 月 1 日付で福島県立医科大学会津坂下腎栄養アカデミー教授兼腎臓高血圧内科教授に就任した。2002 年に新潟大学医学部を卒業後、新潟県内の病院で腎臓病・糖尿病診療に携わり、研鑽を積んだ。2009 年には、新潟大学機能分子医学講座の斎藤亮彦先生の指導の下、学位を取得した。2014 年からは、新潟大学大学院医歯学総合研究科腎研究センター（トランスレーショナルリサーチ部門）病態栄養学講座の特任准教授として、日常診療に従事するとともに、腎臓病学、糖尿病学、病態栄養学に関する基礎・臨床研究にも取り組んだ。また、これらの分野の若手リーダーとして、各種ガイドラインや提言の作成に中心的な役割を果たしてき

た。2022 年には、日本病態栄養学会の若手リーダーに贈られる学会賞「アルビレオ賞」を受賞しており、今後の同分野の発展を担う存在として期待されている。このたび福島県会津地方に拠点を移し、従来から取り組んできた「食と腎臓」に関する研究活動を継続するとともに、地域の腎臓医療ネットワークの構築に携わるほか、メデイカルスタッフや学生の教育など、多方面での活躍が期待されている。

（蒲澤 秀門・FH16）



泌尿器科学
おおさわ たかひろ
大澤 崇宏先生 (FH14)

令和 8 年 1 月 1 日付で、新潟大学大学院医歯学総合研究科腎泌尿器病態学分野の第 6 代教授を拝命いたしました。本教室は 70 年以上にわたり教育・診療・研究を通じて地域医療に貢献してきた歴史ある教室であり、その伝統を継承する責務に身の引き締まる思いです。私は北海道大学卒業後、泌尿器悪性腫瘍を中心に診療・研究に従事し、トランスレーショナルリサーチや多施設共同研究を通じて臨床に還元可能なエビデンス構築に取り組んでまいりました。加えて、低侵襲手術の発展と若手医師の育成にも力を注いでまいりました。私の使命は、これからの新潟、そして日本の医療を支えるため、臨床的にバランスが取れ、独自の資質と高い意欲、リーダーシップと倫理観を備えた次世代の泌尿器科医を育成する拠点を築くことです。新潟の地から臨床・教育・研究のいずれにおいても信頼される教室を目指し、地

域医療への貢献をさらに発展させるべく、教職員一同、力を合わせて取り組んでまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

退任学長・教授紹介



新潟大学 学長
うしき たつお
牛木 辰男先生 (D57)

牛木辰男先生は、2026 年 1 月 31 日任期満了によって新潟大学学長を退任された。

牛木先生は、1982 年（昭和 57 年）3 月新潟大学医学部のご卒業であり、卒業後は直ちに大学院へ進学され、当時の第三解剖学講座の藤田恒夫先生に師事し、電子顕微鏡を含めた形態学を修められた。その後、岩手医科大学、北海道大学で解剖学の教官を務められたのち、1995 年（平成 7 年）9 月に新潟大学医学部第三解剖学講座教授に就任された。研究ではご専門の電子顕微鏡を含め、原子間力顕微鏡やプローブ顕微鏡など新しい技術を用いた顕微解剖学研究にも取り組まれるとともに、幅広い分野で多くの大学院生を指導された。2012 年 2 月から医学部副学部長、2014 年 2 月から医歯学系長、医学部長を務められ医学部の改革、発展に貢献された。そして、2020 年 2 月 1 日に第 16 代の新潟大学学長に就任された。国立大学が苦境の最中での舵取りであり、さらに就任直後は新型コロナウイルスのパンデミックに対応するといった未曾有の事態を乗り切る

必要があり、その中で持ち前のリーダーシップを遺憾なく発揮された。また新潟大学の様々な課題解決に尽力され、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）に採択されるなど、新潟大学が研究大学として発展するための礎を築かれた。2026 年 4 月からは独立行政法人大学入試センターの理事長に就任されており、大学及び高等学校における教育振興の第一線に立たれている。いままでのご尽力に感謝申し上げ益々のご活躍を期待したい。

（佐藤 昇・FH01）



東海大医 脳神経外科
そりまち たかし
反町 隆俊先生 (D60)

2026 年 3 月をもちまして、東海大学医学部脳神経外科教授を退任いたしましたのでご報告するとともに、新潟大学同門の多くの先生方からご指導とご厚情を賜りましたことを深く感謝申し上げます。私は 1985 年に新潟大学医学部を卒業し脳神経外科教室に入局、2008 年から藤井幸彦教授のもとで准教授として研鑽を積み、その後文月会の菊池利夫先生を始めとした諸先輩のご尽力もいただき、2012 年に東海大学医学部脳神経外科の松前光紀教授のもとへ准教授として着任、2016 年より教授に就任しました。東海大学では、脳血管障害の手術治療を核とし、特に内頸動脈閉塞の血行再建のためのハイフローバイパス手術に注力し、バイパス血管の解剖学的研究などにより、全国的にも良好な治療成績を収めることができました。

ました。臨床研究では脳血管障害の研究を展開し、脳内出血における造影剤漏出（スポットサイン）の臨床的有効性や、慢性硬膜下血腫の新たな治療選択肢である中硬膜動脈塞栓術に関係する、血腫発生に伴う中硬膜動脈拡大を MRI を用いて見出しました。また豊富な症例に恵まれ、後進たちが血管障害の手術や研究に挑戦できる土壌を築けたことは私にとつての一番の喜びです。現在の東海大学教授には、新潟大学卒業の高橋雅道先生が就任されており、才能溢れる高橋教授のもとますます発展を遂げることを祈念しております。



魚沼基幹病院
呼吸器・感染症内科
ただ としのり
高田 俊範先生 (D60)

高田俊範先生は令和 8 年 3 月 31 日付で、新潟大学医歯学総合病院魚沼地域医療教育センター特任教授を退任された。高田先生は、昭和 60 年に新潟大学医学部を卒業後、第二内科学教室に入局された。平成 2 年より第一生化学教室において大学院生として研鑽を積み、遺伝子研究の基礎を修得された。さらに平成 10 年には米国テネシー大学へ留学され、マトリックスメタロプロテアーゼ研究に従事されるなど、国際的視野をもつて研究活動に取り組まれた。平成 12 年に帰局後は、第二内科呼吸器グループの中核として、診療・教育・研究の各分野において多大なる貢献を果たされた。平成 27 年に開設された魚沼地域医療教育センターのセンター長・特任教授に就任され、さらに魚沼基幹病院呼

ステレオ聴診が可能にする、聴診の新しい世界

Stéréophonette ステレオフォネット

アメリカ・ドイツ特許の
2 チャンネル構造 (*) により、
心音も肺音もステレオサウンドで
聴取できます。

* 御学 1966 年卒 風間 繁先生の発明です。

従来の音情報
(音の強弱・工程)

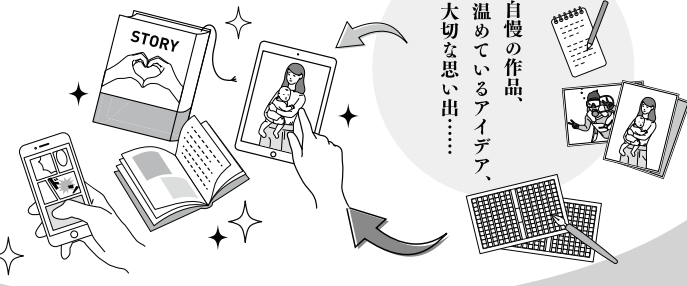
時間差、位相差情報
(音の方向・動き・広がり)



製造販売業者: ケンツメディコ株式会社



「本」に
それ、
してみませんか？



自慢の作品
温めているアイデア、
大切な思い出……

株式会社ウィザップ

上製本でもデジタルでも、本ならおまかせください
<https://www.sksp.co.jp>

【本社】〒950-0963 新潟市中央区南出来島2-1-25 【東京支店】〒110-0016 東京都台東区台東4丁目22 ワタナベビル2階
TEL.025-285-3311 FAX.025-285-5656 TEL. 03-6284-2560 FAX. 03-6284-2561

吸器感染症内科部長・副院長を歴
任された。

ご専門であるびまん性肺疾患領
域においては、特に肺胞蛋白症、リ
ンパ脈管筋腫症、超硬合金肺をはじ
めとする希少肺疾患、さらには間質
性肺疾患の診療・研究において我
が国を代表する第一人者として広
く知られ、学会活動のみならず、新
規治療薬の開発や適応承認取得に
も尽力され、当該領域の発展に大き
く寄与された。

今後も呼吸器医学を支える臨床
医・研究者として、高田先生がま
すますご活躍されますことを、心
より祈念する次第である。

(小屋 俊之・DH05)



弘前大院医 脳神経病理学
わかばやし こういち
若林 孝一先生 (F60)

このたび2026年3月をもち
まして弘前大学を退任いたしました。
私は1985年に富山医科薬
科大学（現・富山大学）医学部医学
科を卒業後、すぐに新潟大学脳研
究所実験神経病理学部門（当時は
生田房弘教授）の大学院生となりま
した。新潟には15年おりましたが、
主に病理解剖を基盤とする神経病
理学、特にパーキンソン病や認知症
の病態について研究を進めてきま
した。1993年から1994年
にかけて約1年間、米国のカリフォ
ルニア大学サンディエゴ校ニューロ
サイエンス部門に留学しました。
1995年6月には高橋均先生が
教授になられ、ご指導をいただきま
した。私を研究者として育てていた
だった新潟大学脳研究所には今も
深く感謝しております。弘前大学

には教授として2000年2月に
赴任しました。赴任当時の教室の
名称は脳神経血管病態研究施設分
子病態部門でしたが、2007年
からは脳神経病理学講座に変わ
りました。弘前大学には2026年

3月まで26年間お世話になりました
が、後半の10年間は医学部長や理
事・副学長として学部や大学の管
理運営にあたりました。2026
年4月からは青森中央学院大学の
学長を務めることになり、現在は毎
日、岩木山と八甲田山を眺めなが
ら、弘前市と青森市を往復しており
ます。以上、これまでの歩みを振り
返り、教授退任のご挨拶とさせてい
たきます。



危機管理室
やまぐち しんいち
と 鳥谷部 真一先生 (D61)

鳥谷部真一先生は1986年に
本学を卒業後、新潟大学の小児科に
入局された。その後、2003年
に新潟大学医歯学総合病院医療情
報部助教授、2007年に新潟大
学危機管理本部危機管理室教授に
就任され、19年間にわたり病院内の
医療安全管理体制の発展に尽力さ
れてきた。

本院における医療安全の歴史は
鳥谷部先生の歩みと軌を一にして
いる。2002年に院内措置として
医療安全管理部が開設され、初代
医療安全管理部長に高橋姿先生が
就任された。2006年に院内措
置が廃止され、正式組織として発足
し、2007年には鳥谷部先生が
第2代医療安全管理部長に就任さ
れた。さらに、医療安全管理者、医
師専任リスクマネージャー（GRM）

も兼任され、医療安全管理を一身に
担ってこられた。2010年には

病院長補佐、2016年には副病
院長（医療安全管理）および医療安
全管理責任者も兼任され、重責を
担われるとともに、医療安全管理に
とどまらず、インフォームド・コン
セント責任者、児童虐待対応チーム
リーダー、臨床倫理コンサルティン
グチームリーダーなども兼務されて
きた。

学術活動においては、医療安全管
理学、医療情報学、小児科学を中心
に幅広く活躍され、転倒リスクアセ
スメントやリスクマイニングなどの
医療安全に関する研究、ならびに医
療倫理学に関する大規模研究に取
り組まれてきた。

教授退任後も特任専門員として
本院に在籍、副病院長、医療安全管
理責任者、GRMとして引き続き
ご尽力いただけることとなった。
本院のさらなる医療安全管理体制
の発展に寄与されることが期待さ
れる。長年にわたるご功績に深く敬
意を表すとともに、今後ともご指導
を賜りたいと切に願う。

(大嶋 康義・DH14)



東海大学医学部
漢方医学
あら い まこと
新井 信先生 (D63)

新井信先生（D63）は、1981
年東北大学薬学部卒、1988年
本学卒という、医師と薬剤師の「二
刀流」を体現された至高の漢方医で
ある。実家の漢方薬局に端を発し、
多くの病人を救いたいという志で
医学部を再受験。東京女子医科大
学消化器内科での研鑽を経て黎明
期の漢方の道へ進まれた。2005

年東海大学医学部寄付講座へ移籍
後、その熱意と実行力で2015

年に正規の漢方医学講座を立ち上
げ、2017年に初代教授に昇格
して全国有数の講座へと発展させ
た。小学生の頃に抱いた「漢方の魔
術師」の夢を初志貫徹し、寄付講座
から一代で正規講座を築き上げた
その足跡は並大抵の努力ではなく、
真に敬服に値する。

臨床のみならず、「神奈川県4大
学医学部FDフォーラム」を組織し
てマイナーだった漢方教育の基盤を
築き、のちに全国組織「日本漢方医
学教育協議会」へと昇華させ、漢方
標準化への道を開いた。本学を含
む15大学での後進育成にも尽力さ
れた。研究面でも生薬オウギの慢
性腎臓病への有用性を世界へ発信
し、学会要職を歴任して斯界を牽引
された。

退任後は聖マリアンナ医科大学・
東海大学医学部客員教授として、今
なお情熱を絶やさず臨床の第一線で
患者と向き合われている。本学が誇
る、偉大な先達の新たな門出を祝し
たい。

(瀬賀 弘行・D63)



保健学科
こやま ゆう
小山 諭先生 (F63)

私は1988年に群馬大学医学

部を卒業し、武藤輝一教授が主催さ
れていた新潟大学第二外科（現、消
化器・一般外科）に入局し、外科医とし
ての研鑽を積んだ。第一外科では栄
養代謝班（GI班）に所属し、主に食
道がん患者を中心とした間接熱量
測定や栄養アセスメントに携わり臨
床研究に従事していたが、畠山勝義

教授のご高配により1995年か

ら腎研究施設構造病理学分野（木
原達教授）でリサーチする機会をい
ただいた。腎研究施設では存在が
明らかに成りつつあった水チャネル
Aquaporin(AQP)に興味を持ち、
当時未だ発見できていなかった消
化管上皮細胞のapical membrane
に発現するAQPを見つけたと思い、
山本格先生のご指導のもと日夜
を問わずcloningを行って、AQP8を
発見するというのが（JBC 272(48):
30329-30333）、1998年に学位
を取得することができた。なお、私
の後に腎研究施設で研究した後輩
外科医はAQP10を発見している。
第一外科に戻ってからは、研究班が
乳腺内分泌外科も担当するGIE
班となっており、乳腺・甲状腺・副
甲状腺疾患（主にがん）の臨床に携
わった。栄養関連では新潟大学医
歯学総合病院の栄養サポートチー
ム（NST）立ち上げに加わり運営
に従事した。2015年からは新
潟大学医学部保健学科・大学院保
健学研究科教授に就任し、主にメ
ディカルスタッフの教育に従事する
傍ら、乳がん手術にも携わった。

2026年3月31日をもって新
潟大学医学部保健学科・大学院保
健学研究科を退任となったが、今
後新潟大学医学部ならびに医学部
学生会のますますのご発展を祈っ
て、ご挨拶とさせて頂く。これま
でご指導いただいた先生方、同僚
や後輩の皆さまに心より感謝申し
上げる。

有壬だよりでは医科系以外の新任・
退任教授もご紹介しております。
是非、情報をお寄せ下さい。

学会の運営サポートは、お任せください。

コンベンションの開催準備業務から会計報告まで、一元管理体制でサポートいたします。

株式会社 新宣【メディカルソリューション推進部】

〒950-0983 新潟市中央区神道寺2-3-4

TEL:025-278-7232 FAX:025-278-7285

E-mail: info7232@shinsen-mc.co.jp

SHINSEN

株式会社 新宣

業務内容

各種イベント企画、運営 / PCO業務(事務局代行) / 展示設計、デザイン、施工
制作、施工管理業務全般 / ディスプレイ、装飾 / 各種サイン設計、施工
広告代理 jeki 株式会社 新日本企画 指定代理店

<https://shinsen.biz/>



令和8年度 公益財団法人 新潟医学振興会の

賛助会員を募集しています

学士会員の皆様からのご寄附により当財団の運営は支えられ、医学・医療の振興
や安定供給のため、医学生への修学資金貸与、臨床研修医への奨学金給付、学会へ
の助成その他の事業を実施しております。当財団の事業またその意義をご理解いた
だき、是非とも賛助会員としてご協力くださいますようお願い申し上げます。

賛助会員としてご協力いただける方は下記までご連絡ください。

〒951-8510 新潟市中央区旭町通 1-757（新潟大学医学部内）

公益財団法人 新潟医学振興会

TEL 025-227-2176 FAX 025-225-5555

E-mail: medsinko2@med.niigata-u.ac.jp

個人会員（年額）1口 5,000 円より
法人会員（年額）1口 50,000 円より

学会報告

第74回日本感染症学会 東日本地方会学術集会

第72回日本化学療法学会 東日本支部総会 合同学会

齋藤昭彦教授（新潟大学大学院医歯学総合研究科 小児科学分野）が第74回日本感染症学会東日本地方会学術集会会長、菊地利明教授（新潟大学大学院医歯学総合研究科 呼吸器・感染症内科学分野）が第72回日本化学療法学会東日本支部総会会長の任に当たり、2025年9月24日から26日までの3日間、朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターにおいて合同学会を開催した。テーマは「つなぐ Connect」次の四半世紀に向けて―とし、感染症学と化学療法学の知をつなぎ、世代、職種、地域を越えた議論の場となることを目指した。現地開催に一部WEB配信を併用したハイブリッド形式のもと、特別講演、教育講演、シンポジウム、一般演題、抗菌薬適正使用生涯教育セミナー、ICD講習会、共催セミナーなど、多彩なプログラムを実施した。1478名と多数の参加を得て、ワクチン、薬剤耐性菌、真菌症、性感染症、感染対策、国際共同研究など、現在の感染症診療が直面する幅広い課題について活発な討論が行われた。新潟の地に多くの参加者を迎え、臨床、研究、教育を次世代へつなぐ意義を改めて確認する機会となった。開催にあたり多大なるご支援を賜った関係各位、ならびに参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

（青木 信将・DH15）

第44回日本認知症学会 学術集会

第44回日本認知症学会学術集会は、2025年11月21日から23日までの3日間、新潟市・朱鷺メッセにて開催された。開催期間中は天候にも恵まれ、晩秋の新潟らしい穏やかな空模様の中、多くの研究者・医療関係者による活発な議論が繰り広げられた。池内健大会長のもと、アルツハイマー病をはじめとする認知症研究の最新知見が数多く報告され、個人的にはゲノム解析、シングルセル解析、プロテオミクス

宮下 哲典

第17回日本レックリング ハウゼン病学会学術大会

第17回日本レックリングハウゼン病学会学術大会を、去る2月22日に新潟医療人育成センターにて開催した。全国から多職種の医療関係者が参加し、最終的な登録者数は116名となった。本大会では「遺伝性腫瘍としての神経線維腫症1型」をテーマに掲げ、第一線でご活躍の先生方を講師にお迎えし、「遺伝性腫瘍症候群に関する多遺伝子パ

学会予告

・第30回日本ワクチン学会・第67回日本臨床ウイルス学会 合同学術集会
期日 令和8年9月26日(土)～27日(日)
場所 朱鷺メッセ

令和8年度 《第14回》有壬記念医学生研究奨励賞受賞者

氏 名	学年 (申請時)	研究テーマ	指導教員
		研究成果発表	
村山 珠美	3	健康相談による地域住民の健康意識変化と満足度についての考察～ひよっこドクターのほけんしつ～	井口清太郎 今西 明
		第16回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会	
讃岐 陽菜	3	健康相談による医学生の満足度と臨床実習への不安軽減についての考察 ～ひよっこドクターのほけんしつ～	井口清太郎
		第16回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会	
竹中 大樹	3	日本食パターンの食事形式が慢性腎臓病の発症に及ぼす影響:新潟県の地域住民データベースより	細島 康宏
		第16回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会	
岡本 玲奈	4	ヒト消化管オルガノイドによるLeaky gutモデルの作成	芝田 晋介
		第131回日本解剖学会総会・全国学術集会	
西堀 夏帆	4	脳腫瘍に対する近赤外線免疫療法における最適なソマトスタチン受容体抗体の選択	岡田 正康
		第43回日本脳腫瘍病理学会学術集会	
清水 茜里	4	関節リウマチ症例に対するバリシニブの実臨床成績:新潟大学整形外科 関節リウマチ(Niigata Orthopedic Surgery Rheumatoid Arthritis Database; NOSRAD)におけるエビデンス	近藤 直樹
		新潟医学会雑誌 第139巻 115-123 2025	
松尾 美波	4	放射性耐性癌細胞の機能プロテオーム解析	松本 雅記
		日本プロテオーム学会 2025年大会	
前川 愛実	4	HFpEFリスクスコアを利用したカテーテルアブレーション後の心不全増悪予測	猪又 孝元
		第157回日本内科学会信越地方会	
対馬航太郎	4	下水サーベイランスによるエンテロウイルスD68流行の早期検出	齋藤 昭彦
		第57回日本小児感染症学会総会・学術集会	
下村百合華 関 沙帆子 増田 美果	5	医学生による地域住民への健康支援活動の実践と展望～「ひよっこドクターのほけんしつ」の取り組みから～	井口清太郎
		第4回日本地域医療学会 学術集会	
木村 織温 鈴木 澄士	5	Smoking, alcohol consumptin, and risk of recurrent falls in community-dwelling Japanese people aged 40-74 years: The Murakami cohort study	中村 和利
		Geriatrics & Gerontology International 25 (2024) 67-74	
前田 匠斗	5	血液透析中の食事摂取状況におけるコロナ禍前後での変化～新潟透析医学会産科施設へのアンケート調査～	細島 康宏
		第51回東北腎不全研究会学術集会	
萬代 赳史	5	トラベクレクトミー施行患者と非施行患者のQuality-Of-Vision (QOV)スコアの比較	赤木 忠道
		第36回日本緑内障学会	

クリニック開業・移転・承継

We respect doctors and dentists



株式会社 メディプロ
代表取締役 市原健昌

〒951-8124
新潟市中央区医学町通2番町11番地 SHINANOビル2階
TEL 025-378-1710

<https://www.medipro-niigata.co.jp>



令和8年度

《第40回》医学研究助成金(有壬基金)受賞者

〈Yujin Memorial Grant〉

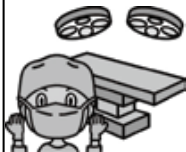
【1件100万円】

受賞者	研究課題
白井 紀好	脳機能発達における感覚情報の意義と社会性形成メカニズムの解明
木村 成宏	Transformer型生存予測モデルを用いた原発性胆汁性胆管炎(PBC)患者における予後および予後に関連する因子発症予測アルゴリズムの開発

新潟大学医学部学士会 会員の皆様へ

「会員総合補償制度」のご案内

保険期間：2025年11月1日午後4時～2026年11月1日午後4時（中途加入随時受付）



支払限度額が拡大！医療業務中の万一来備えて

医師賠償責任保険（勤務医向け）

医療の遂行に起因して、万一患者の身体に障害を与えてしまった場合(死亡を含む)にその法律上の損害賠償責任のご負担を補償します。出張診療中も監督責任を問われた場合も対象。

＜お問合せ先・取扱代理店＞

PIONEER 株式会社パイオニア
Tel 0120-36-8442 Fax 0120-36-1061
<https://www.pioneeritd.com/>



対人1事故につき支払限度額 **3億円**（保険期間中9億円）**23** タイプ登場
産業医等活動保険(任意付帯オプション)も取扱中。

この広告は医師賠償責任保険、産業医等活動保険の概要についてご紹介したものです。保険の内容はパンフレットでご確認ください。また、ご加入にあたっては、必ず重要事項説明をよくお読みください。詳細は団体代表者の方にお渡ししております保険約款および特約によりますが、ご不明な点は取扱代理店または引受保険会社へお尋ねください。
【引受保険会社】東京海上日動火災保険株式会社（担当部）医療・福祉法人部 Tel: 03-3515-4143（平日 9:00～17:00）

2025年7月 25TC-000287

学生特集

山梨大学大学院総合研究部内科学講座消化器内科学教室

土屋淳紀先生にお話を伺って

今回は、山梨大学大学院総合研究部内科学講座消化器内科学教室教授の土屋淳紀先生にお話を伺いました。

土屋淳紀先生 ご略歴

1969年 新潟大学医学部卒業

新潟大学医学部付属病院
内科研修

2003年 京都大学医学部大学院発

達小児科学にて研究（中畑
龍俊教授）

2006年 済生会新潟第二病院消化

器科医長

2011年～2013年

Edinburgh 大学再生医
学研究所にて留学（Stuart
Folkes 教授）

2018年 新潟大学医歯学総合病院

消化器内科講師

2021年 新潟大学大学院医歯学総合

研究科消化器内科学分野
准教授

2024年 現職

Q1. 消化器内科を選ばれた理由を教えてください。

消化器内科の魅力は、若い世代の方から年配の方まで診療でき、予防や最先端治療といった分野で臨床も研究もでき、自分の道を見つけやすいところだと思います。患者さんの生死に深く関わる部分を担当できることも興味を持つたきっかけです。

兄は消化器外科医であり、学生時代から消化器内科には元々興味がありました。消化器内科には、私が所属していた準硬式野球部の先輩が多く、学生の頃から大変大事にしていたいていました。そうした人と人との繋がりを介した自然な流れで、新潟大学消化器内科への入局を迷いなく選択しました。

当初は胃癌の治療に興味がありまし

たが、肝不全の症例を研修医時代に多く経験し、肝臓の難しさや再生能力などに惹かれて肝臓を専門に志すことに決めました。

Q2. 先生が取り組まれてきた研究についてお話を伺いしたいです。まず京都大学の発達小児科学での研究について詳しくお聞かせください。

京都大学を選じた一番の理由は、再生医療に関わる勉強がしたいということでした。研修医時代から肝臓の再生医療に興味があり、研修医の時に日本再生医療学会に行って勉強したりしており、再生医学で特に有名だった京都大学で研究することを決めました。研究期間は、肝臓の幹細胞の培養に取り組みましたが、小児科だったので神経や心臓、血液、免疫など様々な分野の先生方に肝臓以外の事を沢山教えて頂くことができました。

Q3. 京都大学で研究をする中で大変だったことはありますか？

小児科には肝臓について研究してい

る人がいなかったため、自分の研究に繋がりそうなことをしている方のところ

へ自ら直接伺って、教わった内容を一個一個吸収して自分で組み立てなければいけなかったところは大変でした。ただアドバイスをもらいながら、それを積み上げて成果が出てくると、今度は自分で考えられるようになり、自分が当初考えるよりも大きな成果が得られる体験をしました。この経験できたのは本当に良かったですね。

Q4. 先ほど、様々な分野の人と繋がりを作ることが大事だとおっしゃっていました（Q2参照）、人脈を広げていく上に気を付けていることはありましたか？

自分の専門分野の学会に参加することとは基本だと思います。加えて、再生医療学会のような異分野の学会にも参加することも、同じくらい重要に思っています。参加する時には、自分が取り組みたいことが、この人となら実現できそうかいメッセージしながら、学会に参加するようにしています。あとは学会期間中の懇親会に参加して、一緒に取り組みたい研

究についてお話ししたりすることも大事です。話が広がれば、研究室を訪問させてもらって具体的な提案をしてみるなど、実際に会って話をするのが何より大切だと考えています。

ベンチャーや企業と研究や創薬を行うことの重要性は、寺井崇二先生（新潟大学大学院医歯学総合研究科消化器内科学分野教授）から多く学ばせていただきました。このように臨床でのつながり、研究者とのつながり、企業・ベンチャーとのつながりなど重要項目を、私は新潟大学を起点に学び、広げてきました。新潟大学の先生に消化器内科へ導いていただいたいき、京都大学、Edinburgh 大学（Q5参照）と色々なところへ勉強しに行き、また新潟に戻り活躍の場を与えていただきました。一連の経験は自分の中で非常に大きかったと思います。

Q5. イギリスのEdinburgh 大学への留学についてもお聞かせください。何か繋がりがあつて行かれたのでしょうか？

特別な繋がりはなく、自分で探しました。費用や家庭のことなどかなり悩み、〃これを学びたい〃という強い気持ちがあれば、留学をやめることも考えました。その中でEdinburgh 大学の研究には強く惹かれ、自分で直接メールを送り留学が決まりました。

実際に留学して特に勉強になったのは、基礎研究を臨床へ繋げるトランスレーショナルリサーチの考え方です。Edinburgh 大学では、研究者だけでなく、病院や企業が連携しながら、研究成果を実際の医療へ繋げる仕組みが作ら

れていました。また、上司にわからないことを相談に行く、別の研究室や他国の先生を紹介してくれたことも多く、実際にドイツの研究室でお世話になる機会もありました。研究は一人で完結するものではなく、さまざまなスペシャリストと協力することで広がっていくと実感しました。

留学中は研究だけでなく、家族と共に異文化の中で生活しながら、イギリスやヨーロッパ各地を巡ったり、いろいろな経験をしたりと、社会勉強の面でも非常に得るものが多かったですね。英語や文化の違いには苦労しましたが、現地で生活をやり遂げたことは大きな自信になりましたし、人としても大きく成長できたと感じています。

Q6. 研究と並行して現在も臨床の現場に立ち続けていらっしゃると思いますが、その中で、先生ご自身が目指しているものや、大切にされていることを教えてください。

臨床に関しては、患者さんに一人ひとりに対して丁寧に、安全、安心な医療を提供したいというのが根底にあります。また、医師の中には、臨床で35歳くらいを境に〃プラトーン〃に入ってしまう人もいますが、自分は常に少しずつでも学び続けられる人でいたい、メリハリをつけて働きたいと若い頃から考えていました。20代の頃から、〃一日一進歩〃を自分に課しています。小さいことでも、〃今日は進歩した〃と言えることを必ずするということです。わからないことは調べ、また発表したり、論文に書いたりして、知識を定着させてきました。研究を研究で終わらせないことも意識しています。多分野のスペシャリストでチームを組み、臨床の疑問に基づき研究を始め、トランスレーショナルリサーチそして実際に臨床に還元していく。これが私のスタイルと思っています。この姿勢は持ち続けたいと思います。

Q7. 新潟を拠点に様々な人と関係を築かれてきた中で、医師として新潟で働くことの魅力やメリットは、どんなところにあると感じていますか？

私は、初期研修や専門研修の頃にどれだけ親身になって指導してくれる人に出会えるかが、成長に大きく影響すると考えています。新潟大学卒業生には、真摯に学ぶ姿勢で臨めば、新潟でそういう出会いがある確率が高いと思います。

私自身も内科研修中にすごく親身になって指導してくれた先生方に出会い、多くのことを経験させてもらいました。研修時代の私にとって大事なものは、〃病院そのものの〃や〃給料〃より、〃自分を育てくれる先生に出会えたこと〃でした。それが、自分の成長の最重要ポイントだったと思っています。

皆さんも将来、新潟大学出身ということで、先輩方が親身に丁寧に教えてくださったりする機会も多いと思います。新潟という環境をぜひ活かしてほしいなと思いますね。

Q8. 最後に新潟大学の学生にメッセージをお願いします。

一番伝えたいことは、新潟大学は非常に素晴らしいという点です。新潟大学、新潟県の医療は全国レベルですし、この科にも素晴らしい指導医がたくさんいるので、医師としてとても働きがいのある場所だと改めて思います。

また医師になって、自分の道を切り開いていく中で、サポートしてくれる恩師に出会うことはやはり重要です。一番大事に育てていただける母校を起点にキャリアを築いていくことは、非常に良い環境だと思います。

私が大学病院や関連病院で臨床経験を積み、国内・海外の留学を経てキャリアを積み重ねて来ることができたのも、消化器内科をはじめ母校の先生方のサポートがあつてのことであり、この場をお借りして感謝を申し上げます。後輩の皆様にも新潟大学の素晴らしい環境を活かして経験を積んでいただきたいです。私自身も新潟大学卒業生であることを誇りに、新潟大学で学んだことを、山梨大学で発揮して恩返しをしていきたいと思っています。

インタビューを終えて

土屋先生のお話を伺い、自ら積極的に行動して広い人間関係を築いていくことが、医師としての可能性を大きくすることを学ばせていただきました。専門性が高い医師の社会で、分野を超えて人脈を形成することは、自身の視野を広げ、さらに研究の質を高めることにも繋がると強く感じました。私達も自分の興味の幅を狭めすぎず、沢山の方と関わる機会を一つ一つ大切にしながら、研究にも臨床にも熱量を持って取り組める医師を目指したいと思っています。（5年 阿部はる菜 前川 愛美 宮崎 衣李）



準硬式野球部時代 中央で賞状を手にする先生



山梨大学消化器内科の職員の皆様とともに



有壬記念館にて、楽しく取材させていただきました

研究室訪問

今回は神経解剖学分野の臼井紀好教授を訪問し、お話を伺いました。

臼井紀好教授 ご略歴

2007年3月

日本大学生物資源科学部応用生物科学科卒業

2012年3月

総合研究大学院大学生命科学研究科生理科学専攻

2010年4月～2012年3月

日本学術振興会 特別研究員DC2

2012年4月～2017年3月

University of Texas Southwestern Medical Center Postdoctoral Fellow

2017年4月～2018年2月

福井大学子どものこころの発達研究センター 特命助教

2018年3月～2020年8月

大阪大学大学院医学系研究科 特任助教

2020年9月～2021年9月

大阪大学大学院医学系研究科 助教

2021年10月～2025年8月

大阪大学大学院医学系研究科 准教授

2025年9月～2026年3月

新潟大学大学院医歯学総合研究科 教授

2026年4月～現在

新潟大学大学院医歯保健学研究科 教授



臼井先生と3年生編集委員
神経解剖学教室にて

Q1. 先生は現在どのような研究を行っていますか？

僕たちの研究室は脳の発生と発達に着目していて、疾患でいうと主に自閉スペクトラム症の研究をしています。遺伝子の変異や、妊娠中に母体で感染症などが起きた時に自閉症のリスクが上がるのですが、私たちはそれを動物モデルを中心として研究しています。例えば、自閉症に関連する遺伝子をノックアウトした動物で病態を再現し、どのように脳が出来上がってきて、それが自閉症の病態研究にどう生かせるのかということを見ています。また、人の血液サンプルを用いて、特定のタンパク質などの成分が、何か診断に使えないかという開発もしています。血液から見つけた物質が、動物モデルでどう機能するかを検証し、治療や治療法の開発につなげられたらと思います。

Q2. アメリカに留学されていますが、楽しかったことは何ですか？

世界トップレベルの人たちと最先端の研究ができたことです。僕が留学していたテキサス大学サウスウェスタンメディカルセンターは、みんなが最先端の研究をのびのびとできる場所でした。大学では週に1回ほどセミナーがあり、アメリカから先生を毎回招いてお話を聴くことができます。

など、研究環境が充実していて楽しかったです。プライベートでは、仲間と集まって遊びに行ったりもして、海外の多様な文化を知ることができました。色々な文化や考え方に触れたことで、研究に対する視野も広がりました。日本の研究スタイルと比較すると、アメリカでは実験の進め方や研究環境のシステム自体が合理的でした。高額な機器は共通スペースに置かれていて、常に最新の機器を使ってアクティブに研究をスタートできる環境が整っていました。さらに、隣の研究室との境界も部屋ごと

に壁で区切られているわけではなかった。色んな人と自然に交流できましたし、多様な世代の研究者と知り合えたことも本当に良かったと思います。

Q3. 研究者としてやりがいだと感じることは何ですか？

若い時は自分で研究して、トップジャーナルの論文を書くということを目指していました。世界で誰も知らないことを見つけたら、自分が今興味を持っていることをもっと深く理解したりするために自分で仮説を立てて実験をして、それが証明できた時は本当に嬉しかったですし、逆に、全く違う結果になって失敗ばかりの時でも、方向転換して新しいことが見つかることもあります。そうやって「誰も知らないこ

とを世界で一番最初に見つける」という喜びが若い時はありました。その結果として良い研究になり、評価されることはやはり嬉しかったですね。今は自分が教えている学生やスタッフが、僕と同じような体験をして「研究が楽しい」と言ってくれるのが喜びだと感じています。大学院生やスタッフがディスカッションをしに来て、アイデアを話し合っている時間が楽しいですね。僕が教えた学生たちが今後、さらに次の世代を育てたり、自分の研究テーマを発展させて活躍していったりすることが、最近の新しい楽しみになっています。

Q4. 最後に、学生に向けてメッセージをお願いします。

医学生になると、高校生までの頃とは違って自分の世界がどんどん広がって、先輩や後輩、先生方など、多くの出会いがあるはず。そうした出会いを大切にしたいなと思います。色々な人と出会って様々な考え方に触れ、人として成長していったほうがいいですね。最終的に皆さんは医師になり、人を相手にするわけですから、自分の豊かな人生経験を通して、患者さんの思いや辛さを受け止められるような人間性を育ててほしいと願っています。また、解剖学の教育に携わる人間として、医療に対する倫理観の初心をいつま

たまに きなせや こんな店

〈第51回〉 感化 ヌーベルシノワ

今回は古町通6番町の新店「感化 ヌーベルシノワ」を訪ねました。かつて「俺のイタリアン新潟古町店」が歴史を刻んだ跡地に誕生したこの一軒は、実は以前は「いくとぴあ食花」にて愛されていました。一歩足を踏み入れると、

よくある中華風の内装とは一味違った、シックで独創的な空間が広がります。デートや記念日にぴったりの落ち着いた雰囲気といえるでしょう。

いただいたのは、贅沢な7品を堪能できる「唯 無二のコース」(税込5、



佐渡銀鮭 搾菜 Tarutaru

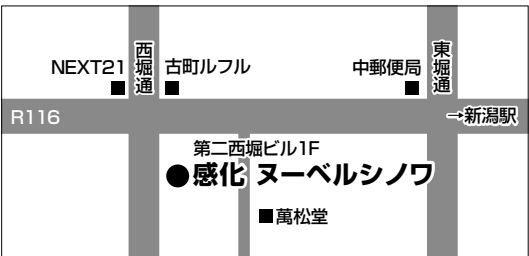


赤木山麓和牛 八色椎茸

500円)。このコースの最大の魅力は贅沢感で、イクラ・ウニ・フカヒレという3大美味を閉じ込めた茶碗蒸しから始まり、堂々たる赤城山麓和牛ステーキ、通常の8倍ほどの大きさのエビが入ったエビチリなど、5、500円のコースとは思えないラインナップを楽しむことができます。運ばれてくる料理はどれも創造的な見た目で、非日常感を味わうことができるでしょう。メインの肉やエビの贅沢感が目立つのはもちろんですが、注目すべきは、彩りを添えるに留まらない存在感を放つ野菜の数々です。上質な県内野菜が素材の味を引き立てるシンプルな調理法で仕立てられており、今回は特に、アスパラガスとカブのグリルをおいしくいた

感化 ヌーベルシノワ

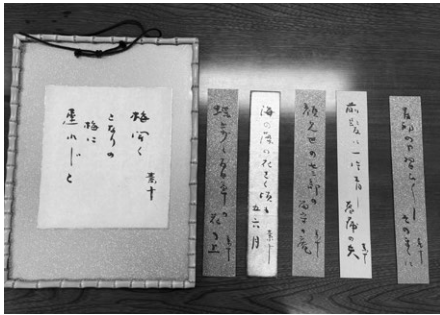
住所：新潟市中央区西堀通905 第二西堀ビル1F
営業時間：11:30～14:30 LO. 14:00
17:30～22:30 LO. 21:30/ドリンクLO.22:00
店休日：日曜・月曜・その他
電話番号：090-7909-3338



だきました。時期を変えれば四季折々の新たな美味しさに出会えるのも魅力ですね。特別な日のディナーや、いつもよりも少し贅沢な女子会の際にぜひ「感化 ヌーベルシノワ」を訪れ、驚きと感動のグルメをご体験ください。
(4年 矢部 絢菜 小田 桃愛 飯島 美純)

クラブ紹介 俳句部

「俳句部なんてあるの?」という皆さんの心の声が聞こえてきますが、それはさておき。俳句部は部員数13名で、月一回木曜日に句会を行っています。参加者各自が兼題(お題となる季語)に沿って俳句を詠んできて、匿名化した状態で各々の良いと思った句



高野素十先生直筆の掛軸と短冊

を選ぶ、という形式です。某査定番組のような辛口の批評は一切なく、俳句に造詣の深い外部の先生の講評を受けながら和気藹々と俳句に親しんでいます。俳句部の部長は代々、法医学の教授が務められています。現部長の高塚先生は句を詠む際、故郷の飛騨高山の自然豊かな山岳風景をよく思い起こすとか。俳句部の歴史は深く、かつて2代目の部長を務めた高野與巳(素十)先生は、高浜虚子が主宰したホトトギス派の4大俳人の一角であるなど、日本の俳句文化の主流を汲むともいえる部活です。

ちなみによく句会の会場となる旭町の有名な居酒屋「五郎」は、前部長である山内春夫(百雷)先生と同級生のお店だそうです。素十先生と同時代にホトトギス派の俳人としても活躍されたお一人に、脳研究所の礎を築かれた中田瑞穂(みづほ)先生がおられます。赤門を入れて左側には、「学問の静かに雪の降るは好き」という句を刻んだ石碑があります。

(4年 村山 珠美)
(4年 学生編集委員)

でも忘れないでほしいです。肉眼解剖や神経解剖などの実習で、初めて人の身体や組織を扱った時に感じた緊張感や感覚を、ずっと忘れないでいてもらえたらと思います。勉強ができることや手術がうまいことはもちろん大切ですが、それだけではありません。自分が病気になる時、パソコンの画面ばかり見て相槌を打つ医師と、しっかりと自分の話に耳を傾けてくれる医師、どちらに診てもらいたいかということから、しっかりと自分自身のキャラクターを育てながら、成長していったらなと思います。

インタビュを終えて

臼井先生のご専門の自閉症の実験マウスのお話から研究者としてのご経験までの様々なお話を直接お聞きすることができ貴重な経験になりました。様々な環境の人との出会いや繋がりを大切にすることと人間性を成長させてほしい、という先生からのメッセージを受けてこれまで以上に人との関わりを大事にしていこうと思えました。お忙しい中、興味深いお話を聞かせてくださった臼井先生に編集委員一同心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(3年 澤口 玲七 飯塚 光政
佐々木 小夜子)

第30回 有壬記念学術奨励賞受賞者

健康寿命延伸・消化器疾患先制医学講座

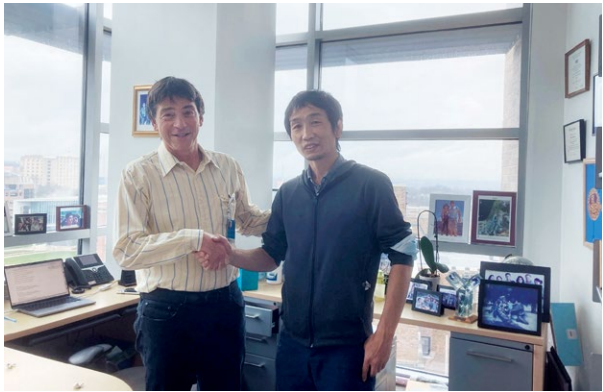
佐藤 裕樹氏 (DH19)

この度、第30回有壬記念学術奨励賞に選出いただき大変光栄に存じます。日頃ご指導を賜っている学士会の諸先生方に御礼申し上げます。

私は2022～2024年にシンシナティ子供病院にあるRothenberg CURED Labに留学する機会をいただいた。振り返れば、消化器内科医になりたての頃から好酸球性食道炎(BoD)に関心を持ち、症例に出会うたびに同ラボのDirectorであるMarc E. Rothenberg先生の論文を眺め、その研究に惹かれていた。私にとってはBoDの神様のような存在でした。

留学中は仮説設定と研究デザインを重視し、全米から収集された患者検体を用いた基礎と臨床を融合した研究に取り組むことができた。自身の研究の幅が大きく広がったことを実感している。

また、これまで臨床研究を主軸としてきた私であっても、臨床的な問いを深く掘り下げることで基礎研究の第一線で活躍する研究者



Marc E. Rothenberg 先生(左)と同研究室にて

が集まるラボにおいても成果を上げることができた。この点は、今後留学を目指す若手研究者にぜひ伝えたい。

最後に、このような貴重な留学の機会を下さった寺井崇二教授、ならびに日頃からご指導・ご支援をいただいている医局員の皆さまに心から感謝申し上げます。

健康寿命延伸・生活習慣病予防治療医学講座

石黒 創氏 (FH21)

第30回有壬記念学術奨励賞を賜り、大変光栄である。私は大学院入学以来、慢性炎症や糖尿病性神経障害の基礎研究と、運動療法に関する臨床研究に取り組んできた。日常診療では、血糖値が改善しても筋力低下や身体機能低下によりQOLが損なわれる患者を数多く経験してきたことから、「骨格筋」を標的とした新たな糖尿病治療の可能性に関心を持つようになった。

今回受賞対象となった研究では、2型糖尿病治療薬イメグリミンとレジスタンス運動を併用することで、骨格筋ミトコンドリア機能および糖代謝が相乗的に改善することを明らかにした。さらに、その背景にNAD⁺-Sirt-PGC-1 α 経路の活性化が関与する可能性を示した。本成果は、糖尿病治療を単なる血糖



国際内分泌学会議／日本内分泌学会学術総会にて。左から2番目が筆者。最も左が指導教官の曾根博仁教授。

管理にとどめず、骨格筋機能維持やサルコペニア予防を含めた包括的な治療へ発展させる可能性を示すものである。

本研究を支えてくださった曾根

博仁教授をはじめ、共同研究者ならびに教室員の皆様に深く感謝申し上げます。

新刊図書案内

■ 題 名 日々の余白に

顕微解剖学者のスケッチブック

■ 著 者 牛木辰男

■ 発行所 西村書店



有壬セミナーご案内

第39回有壬セミナーを、令和8年9月26日(土) 15時30分からだいしほくえつホールで開催予定である。

今回は元フジテレビアナウンサーの笠井信輔氏をお迎えし、「引き算の縁と足し算の縁」《がん》ステージ4からの生還」という演題でご講演いただく。氏は早稲田大学商学部卒業後の1987年にフジテレビアナウンサーとして入社、数多くの番組を担当し、主婦層に人気のアナウンサーとなった。1990年に同業者と結婚し、3児の父親でもある。夫婦共働きの忙しい生活の中で、積極的に子育て・育児に参加し、父親と母親が協力し合っ

て家庭を守るスタイルを貫いている。2019年

フジテレビを退社しフリーアナウンサーとなったが、同年に悪性リンパ腫に罹患していることを公表。治療の結果、2020年に完全寛解した。

現在はがんの啓発活動や講演、テレビやラジオへの出演など、幅広く活動されているほか、闘病体験を綴った著書も出版されている。そんな氏がご講演くださる「引き算の縁と足し算の縁」《がん》ステージ4からの生還」、ぜひ皆様にご覧いただきたい。

(谷 優佑・DH22)



一枚の 写真から

2002年3月、私たちはローマにいた。日韓ワールドカップ開幕を三ヶ月後に控え、サッカー熱が世界中に漂っていた頃だ。写真は色褪せ、粒子が粗い。使い捨てカメラで切り取ったスタジアムの一場面、あの時代の英雄、中田英寿がピッチを駆けていた熱狂は今も鮮明だ。卒業したばかりの三人、先のことなど知る由もなく、ただ無邪気にセリエAに沸いていた。

学生時代はそれぞれ運動部

に所属し、東医体へ向けて汗を流した。水泳、バレー、柔道と競技は違えど、全力を尽くした日々は共通していた。

それから二十余年。今年、二人の教授就任を機に、この旅の写真を引き張り出した。永橋昌幸は名古屋大学乳腺・内分泌外科、大嶋康義は新潟大学危機管理本部危機管理センターへ就任した。それぞれに平坦ではない道のりがあったであろう。

色褪せた写真を眺めながら思う。医師のキャリアに決まった形はない。三人もまた、それぞれのフィールドで着実に積み重ねてきた。ローマは「永遠の都」と呼ばれるが、あの旅の記憶もまた、色褪せない。

(平石 哲也・DH14)



色褪せた写真の三人(左から永橋、平石、大嶋)

編集後記

最近面白い記事を見た。「マンガを紙の本で読むのとタブレットで読むのでは、脳活動への負担が異なる」とを東大の研究チームがfunctional MRIで示した。紙群ではタブレット群よりも短時間で内容を統合して理解でき、内容の統合過程において特定部分の脳活動が抑えられ、脳に負担をかけずに情報処理ができていた。他にも、紙媒体はコマの配置やページをめくること(タブレットのページ移動は機械的)が物語の深い理解を助ける効果があるとのこと。

個人的な実感として、紙の本や新聞・辞書は自身が欲しい情報の周囲にある情報にも目が行き思わぬ知識を得ることがある。デジタル版は求める情報には素早く到達するが、予期せぬ知識の獲得機会は少ないかもしれない。今は殆どの学生がタブレットで勉強しているが、たまには紙の本で勉強してみると脳への負担が軽減できて良いかもしれない。有壬だよりは紙媒体なので、脳に負担をかけずに読んでいただけると期待している。

山田 貴穂(DH07)

編集委員

川島寛之(DH08) 池内 健(DH03)
関 奈緒(DH03) 木下義晶(FH05)
山田貴穂(DH07) 大石 誠(DH09)
阿部隆之(FH09)

学生編集委員

5年生 阿部はる菜・前川愛実・宮崎衣李
4年生 矢部純菜・小田桃愛・飯島美純
3年生 澤口玲七・飯塚光政・佐々木小夜子

●有壬だより

〒951-8510 新潟市中央区旭町通1-757
新潟大学医学部学士会

有壬だより編集部

TEL (025) 227-2037 (直通)

FAX (025) 227-0751

e-mail address yujin@med.niigata-u.ac.jp

学士会ホームページ

https://www.med.niigata-u.ac.jp/yujin/

印刷:(株)博進堂 TEL(025)271-2675